

【実践報告2】

「ふるさとの色ってどんな色？」 ～いろみつけ・いろくらべをとおして～

明星幼稚園 5歳児担任 越 智 亜 也
安 部 志 歩
長 野 茉 優



【どうやっているをつくる？】

1. はじめに

年度当初、「地域の色・自分の色」研究会より「ふるさとのたからもの」の本の紹介があり、「幼稚園で別府の色探しや色遊びを楽しみませんか」とお誘いがあった。地獄めぐりから色を探したり、地獄の泥を材料に色で遊んだりして別府の色を楽しもうという内容であった。

これまでに経験したことのないふるさとの自然や社会と関わり、楽しい体験や発見が出来ることを期待して、別府の色遊びを年間の指導計画に組み入れることにした。

色遊びの材料の提供や遊び方は、「地域の色・自分の色」研究会の方に教えていただくことになり、保育者も楽しみであった。

自然が出した色の優しさや、ぬくもりを活動の中で感じる事ができたら子どもたちの色に対する意識はどう変わっていくのか知りたくと考え、実践に取り組むことにした。

普段の生活の中で、子どもたちはどのように色を見ているのか、クレヨンやマジックなどを見て、「〇〇色って書いてあるから、これは〇〇色」としか意識していなかった子どもたちが活動をとおして新鮮な気持ちで色と向き合い、思いを伝え合う姿を見ていき、その時の様子を記録に残したいと考えた。



【ふるさとのたからもの】

2. 研究の内容及び方法

(1) 研究内容

- ① 絵本や映像をとおして、いろいろな色があることを知り、興味を持てるようにする。
- ② 実際に色を見つれたり、自分で色を塗ってみたりして色に親しめる活動をする。

(2) 研究方法

- ① 保育室にもいろいろな色があることに気づき、自分が見つけた色をクレヨンを使って作ってみる体験をする。
- ② 小学生と別府の地獄めぐりの映像を見て、気づいたことを伝え合う。
- ③ 遊びの中で色水に触れたり、実際に作ってみたりする。いろいろな素材や道具を使って遊び、発見したことを言葉にする。

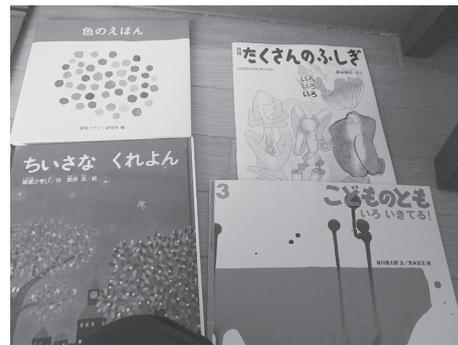
【4月】

絵本を通して

子どもたちが色に親しみを持てるよう、色にちなんだ絵本を誰もが自由に読める本のコーナーに置いた。また、その中から読み聞かせを行い、色に興味を持てるようにしてみた。絵本の中に出てきた色を子どもたちと話したり、色の持つ雰囲気など感じさせたりしてみた。表紙の裏にある色も「なぜこのいろにしたんだろう？」と疑問に思う声も聞こえて、本の内容だけでなく、本自体が出しているイメージについても話が広がる場面があった。



【このくり、このいろといっしょ！】



【色にちなんだ絵本】

小学生といっしょに「ふるさとのたからもの」を見ながら

地域の色研究会が出版した「ふるさとのたからもの」という本を1人1冊ずつ頂き、その中で子どもたちはどんな色があるか探した。小学生が見つけたという色を見て、どこにその色があるのかを探したり、小学生がまだ見つけられていない色を見つけて発表したりして楽しんだ。

保育室の中にある色を探してみよう

保育室の中にはたくさん色がある。子どもたちは保育室の中を見渡し、見つけた色を口にした。言葉で表現できる色もあれば、何色と言って良いか悩んでしまう色もあった。「今度は自分が見つけた色を自分で作ってみようか。」ということになり、丸（○）の書かれた紙をたくさん用意し、子どもたちが自由に使えるようにすると、見つけた色を作って塗っていった。

塗った紙は、そのものの所に貼り、友だちが見つけた



【なにいろがはいっているかな？】

色も見合うことにしていた。塗っている最中にも友だち同士「どこの色塗ってるの？」と聞き合う場面があったり、「これ、ここの色でしょ？」と嬉しそうに当てたりする姿があった。友だちが見つけた色に対して否定することはなく、「いい色ができたね。」「同じ色つくってみてもいい？」と認め合う場面がたくさん見られた。また、単色で塗る子どもがほとんど見られず、じっくりそのものをみて、「青の中に黒も見えるんで！」「緑もまざってるって！！」などその色が持つ複雑なところを感じようとする姿もあった。



【かみしばいのいろとおなじだ】



【このいす、あかじゃないんだね】

小学生との交流（地獄めぐりの映像を見て）

ふるさとの色（地域の色）を探そうと、小学生と一緒に血の池地獄、竜巻地獄、天然坊主地獄、山地獄、海地獄の映像を見た。行ったことのない子どもが多く、見たことのない地獄の様子に釘付けになる子どもたち。1回目は地獄が何なのか知り、2回目は映像の中で気づいたこと、不思議に思ったことなど話した。小学生と一緒に見つけた色を書き、地獄の映像の中で見たことを絵で表現してみた。



【じごくめぐりにいきたいね】

以前、見つけた色を作る活動をしていた子どもたちは、この日も同様にクレヨンで何度も重ね塗りをして見つけた色により近づけようとする姿が見られる。しかし、地獄の色は難しく、「この色作りたいけど、どうやって作ればいいのかわからない。」という声に気づいた小学生は、きちんと耳を傾け、「見える色をどんどん塗っていけばいいんじゃない？」と教え、幼稚園の子どもだけでは進まなかったことも小学生と一緒に進めることができ、両方が満足した活動になったようだ。

色だけでなく、自然の不思議さや素晴らしさも感じたようで、終始、「地獄っちすげー！！」と言って感動しており、坊主地獄を見た時は「泥が固まってぼこぼこしてる。」「これ、葉になるんでなあ。



【じごく、すごいね】



【ほんとっしょだ！】



【どうやってかけばいい？】

これ飲めるのかな？」 竜巻地獄を見た時は、写真の中でしか見たことがなかったので「上から下に落ちてるのかと思った！」と驚いている姿が印象的だった。血の池地獄では「あれ、血じゃないよな」「どうしたらあの色になるんだろう？」「土とか他にいろいろなものが混ざってこんな色になってるんじゃない？」と色に対してもどうしたらこの色になるのか興味を示す子どもも出てきた。

【5月】

絵の具で色づくり ～自分だけの特別な色を作ってみよう～

年長になると、自分の絵の具を用意し、絵画制作の時は個人持ちの絵の具を使うようになる。初めての時は、絵の具の使い方やクレヨンや色鉛筆では出来ないことに挑戦したりして、絵の具と仲良くなることを目的にしてしている。今年はその上、絵を描くというより、自分の色を作ってみることにねらいを置いてしてみた。クレヨンの時には表せなかった色がたくさんでき、興奮している子どもたち。「先生、いい色ができたよ。」「これな、お茶色っていうんだよ。」「これは何色と思う？もう二度と作れないよ。」と友だちや保育者と見せ合ったり、いくら時間があっても足りないくらい色作りに夢中になったりしていた。

【6月】

色水遊び① ～どんな色ができるかな～

暑くなってきて、生活の中にも水を使った遊びが盛んになってきた。色に興味が出てきた子どもたちは、砂場の道具に葉っぱや草花を入れて、「先生、色水の実験がしたい。」と言ってきた。「色水の実験？」と聞き返すと、「これを使って色水作ったらどんな色ができるのか実験してみるんや。」と伝えに来る。すり鉢に入れて、棒でこすってみたり、ペットボトルに入れて振り続けたり、いろいろな方法で試しながら作っていた。その中で、「この葉っぱは色がたくさん出る。」「これは色がきれいな花びらだけど色は出にくい。」「厚みのない花びらの方がいい。」など、友だちと試したことを伝え合って遊びを楽しくしようと工夫する姿があった。



【きれいないろがでるね！！】

友だちと試したことを伝え合って遊び

【10月】

土で絵の具作りに挑戦！作った泥絵の具で絵が描けるかな？

7月に自分の色づくりを経験した子どもたちに、今度は、「身近にあるもので絵の具を作ってみないか」と提案した。

「えー？そんなのできるん??」と半信半疑な子どもたちだったが、作ってみることにした。

「園庭にあるどこの土を使ってみてもいいよ」と言うと、花壇の土、子どもたちの大好きなサラサラ砂、園庭の砂利の混じった砂など、グループのリーダーを中心に土、砂を選び、使う道具も自由に選んで作り始めた。集めたものをいろいろな方法で粒子を細かくした。次に、コーヒーフィ



【とろとろのえのぐができそう】

ルターを使ってろ過して、残った泥に水糊をいれて完成。色だけでも全てのグループが違う。人のグループと見比べている子どももいる。とろとろしたものもあれば、砂利が残っていてザラザラな絵の具もあり、みんな違っていた。

作った絵の具で絵を描いたが、今回画版を壁に立てかけ、描いてみた。いつもと違う書き方にも楽しさが増し、一目で友だちの描いている絵も見えるので、たくさんの会話が飛び交っていた。怪獣やお花、水族館を描くなど、手作り絵の具でしか出ない味わいが出ていた。



【すてきなえがかけたよ】

まとめ

- まわりにある色に関心を持ち始めた。例えば、赤であっても「しょうぼう自動車色」とか緑でも「お茶色」「木色」など、見つけた色に自分で名前をつける場面も見られる。
(豊かな感性と表現) (言葉の伝え合い)

- 色水遊びでは、身近にある花から出る色水、実から出る色水作りに熱中した。同じ花や実でも、その量によって色水の色が変わることを体験し、色の濃淡を比べていた。色の濃淡を味わうように、色水の袋を階段状にフェンスに並べた。太陽の光を浴びた色水の美しさを十分味わったようだ。子どもたちはフェンスの色水を触ったりして、いつまでも色水の傍にいた。
(豊かな感性と表現) (自然との関わり) (思考力の芽生え)

- 園庭の泥遊びでは、グループで協力して細かな土や砂を作ろうとする。この遊びの場面には、子ども個々のめあてだけでなく、共通のめあてが生まれていた。それは「この土は、きっと〇〇な色に違いない」という会話が生まれたり、「協同性」の芽生えにつながるものになっていた。
(協同性)

土の絵の具ができてから、「くろーい絵の具」「ザラザラしてる」「重ーい」その感触を表現している。

(豊かな感性と表現) (言葉の伝え合い) (自然との関わり)



【みんなのいろがちがう！！どれもきれいだね】

(参考文献)

『ふるさとのたからもの～色でさがしてみよう～』

(発行 2021年3月31日)

「地域の色・自分の色」研究会